

# “安らかに信頼していること”

— ヘブライ語聖書における語根שקטとבטהの結合—

日 原 広 志

## 序

### (1) 問題の所在

本論はヘブライ語聖書における語根シャーカト (שקט) とバータハ (בטה) の結合について考察するものである。この結合は特にイザヤ書30章15節「まことに、イスラエルの聖なる方／わが主なる神は、こう言われた。『お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ (בהשקט ובבטחה) 力がある』と。しかし、お前たちはそれを望まなかった。」<sup>1</sup>で知られている。本論で扱おうとしている二つの語根の結合は、この節ではベ・ハシュケート ウー・ベ・ビトハー「安らかに信頼していることにこそ」(בהשקט ובבטחה) という形で、節前半のベ・シューバーヴァー・ナハト「立ち帰って／静かにしているならば」(בשובה ונחת) との並行が確認される。30章15節の研究史においては、前半のシューバーとナハトの結合については、シューバーの語根をめぐる問題や、アッカド語との関連を問う研究が多数なされている<sup>2</sup>。しかしこれに比べると後半のハシュケ

1 以下、章句の引用は『聖書 新共同訳』による。

2 本論ではヘブライ語聖書におけるシャーカトとバータハに絞って考察するために、イザヤ書30章15節のシューバーとナハト「立ち帰って／静かにしている」の問題には立ち入らない。シューバーの語根をシューブ「立ち返る」「悔い改める」、ヤーシャブ「住む」「座る」いずれに査定するかについては以下を参照。Cf. R. E. Clements, *Isaiah 1-39* (Grand Rapids: Eerdmans, 1980), p.248. M. J. Dahood, “Some Ambiguous Texts in Isaiah,” *The Catholic Biblical Quarterly* 20 (1958), pp.41-43. G. G. I. Wong, “Faith and Works in Isaiah XXX 15,” *Vetus Testamentum* 47 (1997), pp.236-246. M. J. de Jong, *Isaiah among the Ancient Near Eastern Prophets: A Comparative Study of the Earliest Stages of the Isaiah Tradition and the Neo-Assyrian Prophecies* (Leiden: Brill, 2007), p.114. 特にシューバーとナハトの結合とアッカド語の関連については K. J. Cathcart, “Isaiah 30:15 נחת בשובה ונחת and Akkadian Šubat Nēḫti/Šubtu Nēḫtu, ‘Quiet Abode,’” eds. I. Provan and M. J. Boda, *Let Us Go Up to Zion, Essays in Honour of H. G. M. Williamson on the Occasion of his Sixty-Fifth Birthday* (Leiden: Brill, 2012), pp.45-56がある。

トとビトハーの結合については十分に注意が払われて来たとは言いがたい。それは女性名詞ビトハーが聖書でイザヤ書30章15節にしか登場しないことに加え、語根シャーカト、バータハの両語がセム語圏で明確な対応を持つ語を見出しにくく、両語の結合に平行例が示せないことと関係している<sup>3</sup>。しかし30章15節の研究の上で、両語の意義と機能の探求は避けて通れない。また、この両語は第一イザヤの元来の終わりであったと言われるイザヤ書32章にも「とこしえに安らかな信頼 (השקט ובטח)」(イザヤ書32:17)の形で登場することから、第一イザヤの使信を理解する上でも重要であると考えられる。さらに、両語の結合は士師記18章のダン族による「静かで穏やかな (שקט ובטח) 民」虐殺記事にも登場する。士師記18章とイザヤ書における両語の対照を明らかにすることも、今日戦争と平和の問題を考える上で示唆を与えてくれると思われる。そこで品詞、性、数の別を超えて語根シャーカトとバータハの結合事例をヘブライ語聖書全体から考察していくこととする。

## (2) 対象章句の絞り込み

### 1) ヘブライ語聖書における語根שקטの登場頻度<sup>4</sup>

語根シャーカトはヘブライ語聖書に動詞シャーカト「静かにしている」「悩まされていない、平静である」で41回登場する。タナフ別の分布としては、トラーに0回、ネビイームに26回、ケトゥビームに15回である。トラーになく、預言書に多く使われているのが特徴である。動詞の態はカル形とヒフィル形の二つのみで、カル形で31回、ヒフィル形で10回である。カル形はトラーに0回、ネビイームに20回、ケトゥビームに11回である。ヒフィル形はトラーに0回、ネビイームに6回、ケトゥビームに4回である。

---

3 Cf. E. Bons, “שקט Šāqat,” eds. G. J. Botterweck and H. Ringgren, trans., J. T. Willis, *Theological Dictionary of the Old Testament XV* (Grand Rapids: Eerdmans, 2006), p.453. A. Jepsen, “בטח Bāṭach; בטח Beṭach; בטח Biṭchāh; בטחון biṭṭāchôn; מִבְּחַח mibhṭāch,” eds. G. J. Botterweck and H. Ringgren, trans., J. T. Willis, *Theological Dictionary of the Old Testament II* (Grand Rapids: Eerdmans, 1975), p.88.

4 本論における語数の計上については Abraham Even-Shoshan, (ed.) *A New Concordance of the Old Testament Using the Hebrew and Aramaic Text* (Jerusalem: “Kiryat Sefer” Publishing House LTD., 1993)に基づく。

動詞以外の品詞としては同語根から派生の男性名詞シェケト「静寂」「平穩」が1回（歴代誌上22：9）登場する。

## 2) ヘブライ語聖書における語根נשׂאの登場頻度

語根バータハはヘブライ語聖書に動詞バータハ「信頼する」で120回登場する。タナフ別の分布としては、トーラーに1回、ネビイームに57回、ケトゥビームに62回登場する。トーラーが少なく、諸書が多い。特に詩編には46回も登場する。動詞の態はこちらもカル形とヒフィル形の二つのみで、カル形で115回、ヒフィル形で5回である。カル形はトーラーに1回、ネビイームに53回、ケトゥビームに61回（うち詩編に45回）登場する。ヒフィル形はトーラーに0回、ネビイームに4回、ケトゥビームに1回である。動詞以外の品詞としては同語根から派生の男性名詞が3つあり、男性名詞ベタハ「安全」が42回（トーラーに7回、ネビイームに26回、ケトゥビームに9回）、男性名詞ビッターホーン「信頼」が3回（ネビイームに2回、ケトゥビームに1回）、男性名詞ミブタハ「信用、信頼」が15回（ネビイームに5回、ケトゥビームに10回）登場する。女性名詞は2つあり、女性名詞ビトハー「信頼」が1回（イザヤ書30：15）、女性名詞バットゥホート「安全」が1回（ヨブ記12：6）登場する。

## 3) 同じ章に両語根נשׂאとנשׂאが含まれているもの

ヘブライ語聖書においてこの二つの語根が接近して現れるケースをまとめると下記のようになる。

士師記8章	11節に男性名詞ベタハ、28節に動詞シャーカト
士師記18章	7、27節に動詞シャーカト、7節に男性名詞ベタハ、7、10、27節に動詞バータハ
イザヤ書14章	7節に動詞シャーカト、30節に男性名詞ベタハ
イザヤ書30章	15節に動詞シャーカト、12節に動詞バータハ、15節に女性名詞ビトハー

イザヤ書32章	17節に動詞シャーカト, 9, 10, 11節に動詞バータハ, 17節に男性名詞ベタハ
エレミヤ書46章	25節に動詞バータハ, 27節に動詞シャーカト
エレミヤ書49章	4, 11節に動詞バータハ, 31節に男性名詞ベタハ, 23節に動詞シャーカト
エゼキエル書16章	15節に動詞バータハ, 42, 49節に動詞シャーカト
エゼキエル書38章	8, 11, 14節に男性名詞ベタハ, 11節に動詞シャーカト

以上9つの章はいずれもネビイームである。各語根はトラーに少なく、ネビイームとケトゥビームで拮抗していることを前項1), 2)で確認したが、両語根の結合に関する限りは、知恵的関心よりも預言上の必要性を背景に持つということが分かる。

#### 4) 同じ節に両語根 שקט と בטח が含まれているもの

二つの語根が同じ節に現れるのは更に絞られ、以下の5つの節である。本論ではこの5つの章句を扱うこととする<sup>5</sup>。節中の登場順に品詞情報も入れて記す。

士師記18章7節	<u>יִשְׁבַּח לַבַּיִת</u>	男性名詞ベタハ (単数)
	<u>שָׁקֵט וּבַטַּח</u>	動詞シャーカト (カル形能動分詞男性単数), 動詞バータハ (カル形能動分詞男性単数)
士師記18章27節	<u>שָׁקֵט וּבַטַּח</u>	動詞シャーカト (カル形能動分詞男性単数), 動詞バータハ (カル形能動分詞男性単数)
イザヤ書30章15節	<u>בְּהַשְׁקֵט וּבְבַטְחָהּ</u>	動詞シャーカト (ヒフィル形不定詞), 女性名詞ビトハー (単数)
イザヤ書32章17節	<u>הַשְׁקֵט וּבַטַּח</u>	動詞シャーカト (ヒフィル形不定詞), 男性名詞ベタハ (単数)

---

5 他に同節中ではないが特に近接を確認できたものにエレミヤ 46 章 25, 27 節があるが、各語根の指示する対象が異なるため本論の考察からは除外する。

エゼキエル書38章11節 הַשְּׂקָטִים יִשְׁבּוּ לְבַטָּח

動詞シャーカト（カル形能動分詞男性複数）、  
男性名詞ベタハ（単数）

調査結果から分かったことは以下の通りである。

- ①語根シャーカトとバータハは同節中に存在するケースは5件であり、エゼキエル書38章11節以外の4つの節においていずれも接続詞ワウ「そして」(ו)で結合されている。
- ②イザヤ書30章15節では接続詞に加えて接頭前置詞ベ「の中で、で以て、によって」(ב)が両語に付されている。
- ③士師記18章7節で個別に存在する男性名詞ベタハを除けば、結合はいずれも語根シャーカトが先、バータハが後である。
- ④イザヤ書だけがシャーカトのヒフィル形ハシュケートを用いている。
- ⑤イザヤ書30章15節だけが女性名詞ビトハーを用いている。
- ⑥イザヤ書以外の3例にはいずれも語根シャーカトがカル形能動分詞男性で、語根バータハが男性単数という共通点がある。

よってイザヤ書とそれ以外で分けて考察することが可能である。そこで、本論では以下に第1章ではイザヤ書以外の3章句を取り上げ、第2章ではイザヤ書の2章句を扱うこととする。

## 第1章 イザヤ書以外における語根シャーカトとバータハの結合

本章では士師記18章7、27節、エゼキエル書38章11節の3章句における語根シャーカトとバータハの結合の意義について考察する。

### (1) 士師記18章7節

五人は更に進んでライシュに着き、その地の民が、シドン人のように静かに、また、穏やかに安らかな日々を送っているのを見た。

その地には人をさげすんで権力を握る者は全くなく、シドン人からも遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかった。

וילכו חמשת האנשים ויבאו לישה

ויראו את־העם אשר־בקרבה יושבת־לבטח כמשפט צדנים שקט ובטח

ואין־מכלים דבר בארץ יורש עצר ורחקים המה מצדנים ודבר אין־להם עם־אדם:

士師記18章には、土地取得の約束が未だ成就していないダン族が、「静かで穏やかな民」(18:27)を虐殺して自分たちの土地を手に入れた次第が記されている。ダン族の偵察員5名が目撃したライシュの住民の静穏な生活の報告に、両語根の結合ショーケート ウー・ポーテアハ「静かに、また、穏やかに」(שקט ובטח)が登場する。この結合は「軍事的抑圧のない静かで平和に満ちた生活」を描写している<sup>6</sup>。序-(2)-4)で既述の通りこの7節には両語の結合に先立って男性名詞ベタハも登場する。同語根の比較検証を通じて、本論主題である2術語の結合の意義についての理解もより深まると思われるので、まずベタハから扱うことにする。

### 1) 男性名詞ベタハ ヨーシェベトラー・ベタハ

男性名詞ベタハ「安全」は、動詞ヤーシャブ「座る／住む」のカル形能動分詞女性単数と接頭前置詞レ「へと／ために」と共にヨーシェベトラー・ベタハ「安らかな日々を送っている」(יושבת־לבטח)で登場する。この動詞ヤーシャブ+ラー・ベタハの形は聖書に19回登場するが、本節では偵察員の見た現実を活写しているため現在の表現として分詞女性単数ヨーシェベト「座している／住んでいる」が使われている。女性単数なので対応する名詞はハー・アーム「その民」(העם男性名詞)ではなく「ライシュ」の町(女性名詞)と文法上は言えるが異論も存在する<sup>7</sup>。住民が安らかに住んでいる描

6 Jong, *Isaiah among the Ancient Near Eastern Prophets*, p.114.

7 一方、ヨーシェベトは「その民」を叙述したものであり、女性形を使用したことは士師記18章の著者がその町の住人に特別な思い入れを持っていたためであるとする解釈もある。Cf. C. F. Keil and F. Delitzsch, *Joshua, Judges, Ruth, I & II Samuel*, Commentary on the Old Testament 2 (Grand Rapids: Eerdmans, 1980), p.435.

写とも、町を安らかに座している女性に見立てて擬人的に表現したものとも採り得る<sup>8</sup>。「平穩に暮らす」とは「ベタハの方を向いて座す／住む」ことである。そこからベタハとは「当然視される安全」<sup>9</sup>、信じるに足る安心の保証と言い得る。それは安全、安心を請け合ってくれる筈の人や物に対する信頼に他ならない。その拠り頼むべきものがあるので、ベタハの方だけを向いて、危険や不安の方は向かないようにして座しているわけで、「無防備な町」であることを意味している<sup>10</sup>。堅固な要塞の中で安全に暮らしているのではなく、安全を保証してくれる何かを信頼しながら、無防備な中で暮らしているのである。

## 2) 「シドン人のように」の介在 ケ・ミシュパト ツイドニーム

このラー・ベタハとショーケート ウー・ポーテアハの間にはケ・ミシュパト ツイドニーム「シドン人のように」(כמשפט צדנים) という2単語が介在している。「シドン人達のみシュパートのように／に従って」の解釈は多様である<sup>11</sup>。接頭前置詞ケを「のように」と採れば、シドン人のみシュパート(流儀、慣習)というものがベタハ「平穩」に生きる民の模範、範例であることを意味し得る。一方、ケを「に従って」と採れば、シドン人のみシュパート(取り決め、法)に従っていることがライシュの民にとってベタ

8 BHS 脚注でもヨージェベト以下 4 単語をライシャーの後に挿入する可能性が指摘されている。

9 Jepsen, “מבט Batach,” p.90.

10 R・G・ボーリンによれば、初期鉄器時代にはせいぜい土塁だけが町を防御するものであったという。R. G. Boling, *Judges, The Anchor Bible* (New York: Doubleday, 1975), p.263.

11 「シドン人のように」についてはみシュパートの語彙が広い射程を持つ関係上、慣習、倫理的な生活様式から傘下に入ることに至るまで解釈は多岐に亘っている。Cf. T. C. Butler, *Judges. Word Biblical Commentary 8* (Nashville: Thomas Nelson, 2009), p.394. J. D. Martin, *The Book of Judges* (Cambridge: Cambridge University Press, 1975), p.190. また H・W・ヘルツベルク(小友聡他訳)『ヨシュア記・士師記・ルツ記 — 私訳と註解 — ATD 旧約聖書註解 5/2』(ATD・NTD 聖書註解刊行会, 2000), 508 頁では「手工業に専念する平穩な小民族の生活様式を指し示している」とする。Keil and Delitzsch, *Joshua, Judges, Ruth, I & II Samuel*, p.434 では「交易と商業によって生活し、戦争へ出かけないこと」としている。

ハ「安全、安心」の根拠であることを意味する。後者はライシュの民とシドン人とが何らかの約束を交わしていることを想定させる<sup>12</sup>。

### 3) 両術語の結合 ショーケート ウー・ポーターアハ

次に位置するのが両語根の結合ショーケート ウー・ポーターアハ「静かに、また、穏やかに」である。その形態は動詞シャーカトのカル形能動分詞男性単数と動詞バータハのカル形能動分詞男性単数が接続詞ワウで結合されたものである。共に分詞のため「シャーカトし（続け）ている、そしてバータハし（続け）ている」と現在的な表現である。男性単数なので名詞ハー・アーム「その民」(עַמּוֹ)と対応している。

#### a 男性名詞ベタハとカル形分詞ポーターアハの違い

まず同じ語根バータハ関連語については既に男性名詞ベタハが用いられているにも関わらず、「シドン人のように」の二単語を挟んでまたすぐ分詞ポーターアハの形で重複して現れる点について考察したい。同語根を比較すれば次のように言い得る。先の男性名詞ベタハは名詞であり、接頭前置詞レによって客体化されていたのに対し、ここの分詞ポーターアハはカル形（基本能動態）であり、分詞と対応する民自身の実存と不可分な行為や状態を表している。ここからベタハは町の無防備性というハード面の不備を暴露し、ポーターアハは民があてにならないものを信頼しきっているというソフト面の危機を暴露する機能を持つことになる。分詞としてのポーターアハは同語根の持つネガティブな側面、思考停止や現状への無関心などを含んでいる可能性がある<sup>13</sup>。

---

12 鈴木佳秀訳『旧約聖書Ⅳ ヨシュア記 士師記』（岩波書店、1998）、196頁では当該箇所を「・・住民がシドン人の規律に従うかのように安心しきって、のんびりと油断して住んでいるのを見た。また、その地には王たちの痕跡も支配を相続する者もいなかった。・・」と訳し、新共同訳とは解釈が大きく異なる。同頁の注一では「安心しきって」(לְבַטָּח) に関して「恐らくシドンと同盟関係にあり、シドンの軍事的な力に依存した衛星都市として存在していたと思われる。」と解説が付されている。

13 Cf. Jepsen, “עַמּוֹ בְּאַחַח,” p.89.



### b カル完了形シャーカトとカル形分詞ショーケートの違い

それでは、もう一つの語根シャーカトがカル形分詞ショーケートになっていることは何を意味するだろうか。E・ボンズ (Bons) によれば、動詞シャーカトはカル完了形「シャーカトした、静穏であった」において軍事行動が一区切りをつけ、内政面でも外政面でも平和がもたらされ、軍事的脅威にもはや直面しないでよい状況と関連し、一方カル形分詞「シャーカトしている、静かに」になると、来るべき戦争で破滅する民の、まだそれを知らない状況を表すと言う<sup>14</sup>。言わば、カル完了形は戦争がやっと終わり、鬨の声も角笛も騒擾も阿鼻叫喚も聞こえないという意味での静けさと、久しく待ち望んだ平和をようやく享受できた者たちの満喫する安らぎである。カル完了形は直前まで戦争に苦しみられた人間や被造世界と結びつく限り、戦後の安堵と関係するポジティブな語である。これに対してカル形分詞は、第一義的にはそのカル完了形の静穏を現在的に味わっている状態である。これ自体にネガティブな色はない。ただ、次なる戦争によって平和な時は終わろうとしているにもかかわらず、今の暮らしはいつまでも続き、何も変わることはないと自分に言い聞かせている静寂であるならそれは問題となる。その時はショーケートは戦前の慢心、現実逃避や思考停止と関係するネガティブな語となり得よう。

### c ショーケート & ボーテアハ

以上語根バータハ関連語のうち特にボーテアハに顕著な側面、語根シャーカト関連語のうち特にショーケートに顕著な側面を確認できた。その両者の結合は、安寧無事状態の自動延長を願う自己中心性と、他者が請け合ってくれる安全への過度の依存性の混在を示している。それ故ショーケート & ボーテアハは「突然の攻撃の犠牲となる瞬間まで、平和の時であるように思える中で民を過ごさせてしまう気苦労のない心性」を指している<sup>15</sup>。

14 Cf. Bons, “טקט שִׁאֲקַת,” p.454.

15 Cf. Bons, “טקט שִׁאֲקַת,” p.456.

更にもう一つの解釈の可能性に言及したい。この両語が初めて結合された士師記18章7節は、土地取得の約束が未だ成就していないダン族が適地を求めて偵察をしている文脈にある。偵察結果の報告（士師記18：9-10）には語根バータハしか登場しないが、7節を偵察隊の印象や評価もそこに投影されたものとして読み得るとするなら、“ショーケート&ボーテアハ”は、攻撃の動機が提供された指標と言えるかも知れない<sup>16</sup>。つまりこの土地は侵略可能であるとのフラグが立った時に、侵略する側が貼る悪意のレッテル“この民虐殺可”の可能性である。

## (2) 士師記18章27節

彼らはミカが造った物と彼のものであった祭司を奪って、  
ライシュに向かい、その静かで穏やかな民を襲い、剣にかけて殺し、  
町に火を放って焼いた。

המה לקחו את אשר-עשה מיכה ואת-הכהן אשר היה-לו  
ויבאו על-ליש על-עם שקט ובטח ויכו אותם לפי-חרב  
ואת-העיר שרפו באש:

ダン族の侵略記事である。静かで穏やかな民は虐殺され、町は火で焼かれる。凄惨な記述に7節と同形の結合（動詞シャーカトのカル形能動分詞男性単数と動詞バータハのカル形能動分詞男性単数が接続詞ワウで結合されたもの）が、ここでは「民」と隣接してアム ショーケート ウー・ボーテアハ「静かで穏やかな民」「シャーカトし（続け）ている、そしてバータハし（続け）ている民」の形で現れる。

### 1) “ショーケート&ボーテアハ”の民

なぜヨシェバー-ライシュ「ライシュの住人」(ישביליש) と書かずに、  
「“ショーケート&ボーテアハ”の民」と形容されているのであろうか。

---

16 Cf. Bons, “שקט Sāqat,” p.455.

7節で愚かさを示し、27節で末路を描き、読者たる、弱肉強食の世界を生き延びねばならない旧約の民への教訓としたものだろうか。あるいは7節で生きるに値しない命とのレットルを貼られ、27節では一方的な殺戮対象となっているライシュの人々の悲劇性を強調すると共に、ダン族の蛮行を批判する意図もあるのだろうか。7節とのつながりを除外して27節単体で本文をそのまま読めば、彼らは最後までシャーカトし続け、バータハし続けていたことを窺わせる。つまり、ダン族が迫っている報を受けても、ライシュの民は今の穏やかな日々がいつまでも続くと考えていたばかりか、ついに侵略と殺戮、占領が現実のものとなっても、民はまだ、頼りになる同盟相手が救援に来てくれると信じていたということになる。

## 2) カル形が含意する自己完結性への批判

ショーケート&ポーターアハが反復される理由のもう一つの説明は、同様に反復されるフレーズから導くことができる。続く28節前半には「その町はシドンから遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかったので、助けてくれる者がなかった。」とあるが、これは7節後半の記述「シドン人からも遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかった。」の反復なのである。この反復により、距離的情報と没交渉性が強調されている。距離的情報はポーターアハの過ちを浮き彫りにする。シドンとの同盟は信じても幻滅に終わるだけの、あてにならないものだった。しかるにライシュは一朝有事にはシドン軍が駆けつけてくれるという安全神話を疑わなかったのである。没交渉性はショーケートの過ちを浮き彫りにする。ショーケートはシャーカトの現在形相当という側面において、“戦争はこりごり、静穏であり続けたい”というそれ自体まっとうな要求ではある。しかしカル形という側面において、それは他者との関係性を問題にしない自己完結的なものである。ライシュはシドンとの同盟一本に町の命運を託し、それ以外の地域との関係性を構築せず、自分たちだけはいつまでも静穏であれるよう希求した。そしてカル形のショーケートを貫いた結果、滅ぼされてしまったのである。

### 3) ショーケート & ボーテアハの多様な側面

新共同訳の「静かで穏やかな民」の記事は無辜の民が虐殺被害者となるこの世の現実の不条理を読む者に想起させずにはおかない。一方岩波訳では27節は「こうして、彼らはミカが造ったものと彼の祭司を奪って、ライシュにやって来た。彼らはのんびりと油断している民を剣の刃にかけて撃ち、その町を火で焼いた。」と訳されている<sup>17</sup>。「のんびりと油断している民」という表現からは、不条理というよりも、愚かさを戒める教訓や警告的意味合いが連想されよう。解釈一つ、翻訳一つで物語から受ける印象は大きく変わることが分かる。「ショーケート & ボーテアハの民」の本文はそれだけ多様な解釈の幅を持っているのである。いずれの解釈もこの民の一面を捉えていると思われる。確かなことは侵略され、おそらくは一方的に虐殺され、滅び、歴史から消え去ったことだけである。そしてこの物語にヤハウエが（18章6節を最後に）全く登場しないことである。18章7節に視線を戻せば、その7節は30の単語から成り、ヘブライ語聖書 BHS で4行に亘っている長い節で、その中にマソラ・パルヴァが6つの単語に付され、BHS 脚注が5箇所に及んでいる。本文の難解さが多くの読み替え提案と解釈を生み出してきた。そこにこの陰惨な物語を書き遺した著者の一様ならざる想いを感じずにはおれない。一面的読み方だけに収斂させてしまうことを本文自体が拒否しているように思われるのである。

### (3) エゼキエル書38章11節

そして言う。『わたしは囲いのない国へ攻め上る。城壁もかんぬきも門もなく安らかに生活している静かな国を襲う』と。

ואמרת אעלה על־ארץ פרוזת אבוא השקטים ישבי לבטח  
כלם ישבים באין חומה ובריח ודלתים אין להם:

---

17 鈴木佳秀訳『旧約聖書Ⅳ ヨシュア記 士師記』, 200頁。

エゼキエル書38章10-13節はマゴグのゴグに対する預言に捕囚後ほどなく付加された断片と考えられる<sup>18</sup>。序-(2)-4)①で既述の通りこの11節だけは他の4章句と異なり、二つの語根が接続詞によってつながれてはおらず、同格表現で隣接して現れる。冠詞付きの動詞シャーカトのカル形能動分詞男性複数が動詞ヤーシャブ「座る／住む」のカル形能動分詞男性複数とさらに接頭前置詞レ「へと／ために」付きの男性名詞ベタハに隣接するハツ・ショーケティーム ヨーシェベール ラー・ベタハ「安らかに生活している」(השקטים יושבי לבטח)の形である。

### 1) 士師記との対比 認定する側からされる側へ移ったイスラエル

序-(2)-4)⑥で既述の通り、その形は士師記18章のショーケートに冠詞が付いて複数形になり、ヨーシェベトの女性単数が男性複数へと変わっただけで、ほぼ同じモチーフである。ここでは、再建されたイスラエルへの侵攻を企て、ゴグが大言壮語する台詞（それ自体、ヤハウエの計画の下で展開する構造だが）において、イスラエルがゴグによって「かのショーケート達」「ベタハに向かって住んでいる者達」と言われている。士師記では異邦人を“ショーケート&ボーテアハ”と査定したイスラエルが、エゼキエル書では異邦人に同じ語根のペアで査定されてしまっている事例である。

### 2) エレミヤ49章との比較 ショーケートになったイスラエル

このゴグの台詞にはエレミヤ書でハツォル攻略を宣言する「バビロンの王ネブカデレザル」(エレミヤ書49:30)の台詞、「立て、攻め上れ。安らかに暮らしている穏やかな国に向かって」(同節)が反映していると言われる。そちらではハツォルはゴーイ シェレーヴ ヨーシェーブ ラー・ベタハ「安らかに暮らしている穏やかな国」(גוי שליו יושב לבטח)と呼ばれていた。

---

18 Cf. J. W. Wevers, *Ezekiel*, New Century Bible Commentary (Grand Rapids: Eerdmans, 1982), p.203. W・ツインメリは「およそ520年かその後」とする。W. Zimmerli, Trans., J. D. Martin, *Ezekiel 2: A Commentary on the Book of the Prophet Ezekiel Chapters 25-48* (Philadelphia: Fortress Press, 1983), p.310.

「ベタハに向かって住んでいる者」は（単数／複数の差はあれ）同じだが、「かのショーケート達」ではなく「シェレーヴのゴーイ」である。つまりエゼキエル書38章11節はエレミヤ書のシェレーヴ「穏やかな」(יָוֵן)ではなく敢えて語根シャーカト「静かな」(שָׁקֵט)を用いたのである。その理由はゴグに狙われているイスラエルとは、直前まで捕囚という、戦争のもたらす抑圧に苦しんでいた民だったからである。ヤハウエはイスラエルを指して「長く荒れ廃れていたイスラエルの山々で、そこには、剣の恐れから解放され、多くの民の中から集められた民がいる。彼らは多くの民の中から連れ出されて、今は皆、安らかに暮らしている。」(エゼキエル書38:8)と語っている。戦争の重圧からようやく解放されて静穏を取り戻すという動詞シャーカトの射程が該当する。イスラエルが「かのショーケート（シャーカトしている者）達」と呼ばれるのは尤もなことである。

### 3) ヤハウエに依り頼む ポーターアハではなかったイスラエル

「ベタハの方を向いて座す／住む」は士師記同様のフレーズであり、領土防衛のための備えが万全ではないことと関係しており、ゴグにも「囲いのない」「城壁もかぬきも門もなく」と侮られている。士師記と通底した侵略者側の視点が確認できる。城壁もないのに、イスラエルは安全を与えてくれるヤハウエを信頼している。それはゴグから見れば、あてにならないものに拠り頼む姿（ポーターアハ）に他ならない。しかし本文が正しくポーターアハの語を欠いているようにゴグの査定は誤りであった。侵略は容易とみた筈のゴグであるが、結果は士師記と異なり、ゴグの軍隊が敗北、壊滅する。イスラエルは虐殺されなかった。ダン族の侵略場面には全く登場しなかったヤハウエが、ここではイスラエルに代わって戦ったからである。イスラエルはポーターアハではなかったのである。

### 4) 両語根の結合と神

この章句は改めて、語根シャーカトもバータハもそれ自体は中立的な概念であることを教える。戦禍を越えて満喫されるショーケートは良い静穏であ

る。真に依り頼むべきヤハウェへのベタハは正しい信頼、真の安全であり裏切られることがない<sup>19</sup>。この断片の付加は、捕囚からの帰還後、城壁の再建が未だなされていない過酷な現実の中で帰還民が抱かすにはいられなかった切実な問いが反響している可能性があると言われている<sup>20</sup>。ヤハウェへの真のベタハに立つ以外にないぎりぎりの選び取りが呼びかけられている。この章句は“ショーケート&ベタハ”になる以外に選択肢を持たない人々と、それを救うヤハウェという主題において、士師記18章への一つの神学的応答となっている。

本章の考察を通じて、序-(2)-4)③に既述の両語の語順についても一つの示唆が与えられた。何故「結合はいずれも語根シャーカトが先、バータハが後」なのか。それは戦後の安堵としてのシャーカト、防衛と関連したバータハ各々の射程から説明し得る。つまり戦争との関係において、戦争→シャーカト→バータハ→戦争という循環が確認できるのである。

## 第2章 イザヤ書における語根シャーカトとバータハの結合

本章ではイザヤ書30章15節、32章17節の2章句における語根シャーカトとバータハの結合の意義について考察する。

### (1) イザヤ書30章15節

まことに、イスラエルの聖なる方／わが主なる神は、こう言われた。  
「お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と。しかし、お前たちはそれを望まなかった。

כי כה־אמר אדני יהוה קדוש ישראל

בשובה ונחת תושעון בהשקט ובבטחה תהיה גבורתכם

ולא אביתם:

19 Cf. Jepsen, “בטח Bāṭach,” p.89.

20 Cf. Zimmerli, *Ezekiel 2*, p.310.

イザヤ書30章15節はイザヤの真正後期預言であり、エジプトと同盟を結んでアッシリアに反抗しようと画策するヒゼキヤ王ら南王国為政者達との激しい論争の中での預言である<sup>21</sup>。両語根の結合の仕方はベ・ハシュケートウー・ベ・ビトハー「安らかに信頼していることにこそ」(בהשקט ובבטחה)である。ハシュケートは動詞シャーカトのヒフィル形不定詞独立形<sup>22</sup>「他者にシャーカトさせること」、ビトハーは動詞バータハから派生の女性名詞単数「信頼」で、両語とも接頭前置詞ベ「の中で／で以て／によって」(ב)が付され、接続詞ワウ「そして」(ו)で連結されている。

### 1) “ハシュケート&ビトハー” によってのみ！

「ハシュケートの中で、そしてビトハーの中で」は「“ハシュケート&ビトハー” の中で」とも訳し得る。そしてこの句は動詞(היה)の前に出ているので強調語順であり、「他ならぬ“ハシュケート&ビトハー” によってのみ(／の中でこそ)、お前たちのゲブラーはあるであろう」となる。新共同訳「安らかに信頼していることにこそ」は強調を正しく訳出している。ゲブラー「力」は王たる者の軍事的才能、ますらおの勇気を指し、戦争、軍備、国防の指標であり、国の安全、安泰の要である。しかしここでは人間自身の力を意味せず、神との関係から溢れる力を指している<sup>23</sup>。

### 2) 論敵の速断 “シヨーケート&ポーテーアハ” の勧めなのか？

この言明は明らかに両語根の結合(בטח וּשְׁקַט)を強調しているので、それは否応なしに聞き手たる旧約の民に、ダン族の輝かしい土地取得伝承であるライシュ占領と「静かで穏やかな民」殺戮を想起させる効果を持つ。ライ

---

21 Cf. Clements, *Isaiah 1-39*, p.248.

22 F. Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs, *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon: with an Appendix Containing the Biblical Aramaic* (Peabody, Massachusetts: Hendrickson Publishers, 1997), p.1053. なお、この旧約聖書ヘブライ語辞書を以下「BDB」と表記する。

23 Cf. A. Weiser, “The Stem בָּטַח,” ed. G. Kittel, trans., G. W. Bromiley, *Theological Dictionary of the New Testament* VI (Grand Rapids: Eerdmans, 1973), p.192.



シュはショーケート&ポーターアハでいたために滅ぼされたのであり、イザヤの対案は、歴史の教訓から学ばず、弱肉強食の原則が支配するこの世の現実を甚だしく無視した空論と看做されるのは当然である。「そうしてはられない、馬に乗って逃げよう」「速い馬に乗ろう」(イザヤ書30:16)ここで論敵はイザヤに対し“ショーケート&ポーターアハでは滅びる。ライシュの民は静かで穏やかでいたために殺された。私たちは現実主義に立つ”と返答しているようである。

### 3) エジプトとの同盟こそ悪しき“ショーケート&ポーターアハ”

しかし、イザヤは空想の世界で遊ぶ理想論者ではない。信仰さえあればライシュのような生き方でも大丈夫という話をしてしているのではない。同じ語根の結合ではあっても、士師記のカル形能動分詞男性単数ショーケートをイザヤはヒフィル形不定詞独立形ハシュケートに変え、士師記のカル形能動分詞男性単数ポーターアハをイザヤは女性名詞ビトハーに変えている。むしろイザヤは論敵の反論を引き出す狙いがあったのかも知れない。たしかにショーケート&ポーターアハでは滅びる。ところで、いざという時には救援に来てくれないあてにならない軍事大国に対する誤った信頼に基づいて安全、安心と自分に言い聞かせる現状無視と思考停止もまたショーケート&ポーターアハの一側面であった。ライシュの民はシドンが救援に来るとあてにしていたために滅ぼされた。今ヒゼキヤ以下南王国為政者がイザヤとヤハウエに内緒で画策しようとしているエジプトとの同盟は、まさにその轍を踏むことではないか。エジプトは遠すぎ、たとえエルサレムが滅亡の危機に瀕しようとして決して救援になど来ない。安心が得られると思っている論敵は、現実主義者イザヤから見れば現状認識が甘過ぎ、国と民の命運をショーケート&ポーターアハの再現実験にさらしているに等しいのである。イザヤはハシュケート&ビトハーによらなければ救いはないと説く。ヒゼキヤ達の歩みはハシュケート&ビトハーではないのである。ではハシュケート&ビトハーとは何であろうか。

#### 4) ハシュケートとは何か

動詞シャーカトのヒフィル形は使役または再帰の意味を持つ<sup>24</sup>。不定詞独立形は使役ならば「他者をシャーカトさせること」となり、再帰（内的使役）ならば「自分自身をシャーカトさせること」となる。イザヤ書30章15節は後者と査定されている<sup>25</sup>。また BDB はシャーカトのヒフィル形についての説明で、「不定詞独立形は名詞とほぼ同じ意味。“静けさ”“安らかさを示すこと”イザヤ書30章15節」と記す<sup>26</sup>。動詞再帰形との査定も、名詞相当語句との査定も、カル形との意味上の差を希薄としており、これも従来の研究があまりハシュケートの態がヒフィル形であることに関心を払わなかった理由であろう。敢えて態の違いに注目することで何が見出されるであろうか。

カル形は基本能動態であり、主語とその行為、状態だけに焦点の当てられた態である。ヒフィル形は使役能動態であり、主語以外の存在も射程に入れた態である。使役であれば、他者がシャーカトするのを主語が促すという関係性が含意される。再帰であれば、カル形でシャーカトできる状況にない主語がそれでも敢えて自分自身にシャーカトをさせるわけで、そこには他者の何らかの外圧（全体行動、強制、要請、励まし、勧め）を想定し得るのである。

#### 5) イザヤ書7章4節との比較

イザヤのハシュケート使用における30章15節と、7章4節の「落ち着いて、静かにして (שקט) いなさい。恐れることはない。」というアハズ王への言

---

24 Cf. Bons, “שקט Šāqat,” p.455. ゲゼニウスはヒフィル形の意味を第一義的には使役形であるが、内的他動詞や強調にも用いられるとして、その一例「ある一定の状況に入ること、更にはその同じ状況にいること」を表現する語根群の例に動詞シャーカト「静かになること、静けさを保つこと」を挙げている。但し、どの章句のハシュケートが該当するかは記していない。Cf. A. E. Cowley, (ed.) *Gesenius' Hebrew Grammar* (Oxford: Clarendon Press, 1910), § 53e.

25 Cf. Bons, “שקט Šāqat,” p.455.

26 BDB, p.1053.

葉の関連は広く認識されている<sup>27</sup>。「王の心も民の心も、森の木々が風に揺れ動くように動揺した」（イザヤ書7：2）とある通り、アハズは自然な行為としては（カル形で）シャーカトするところではない状況にあったわけであるから、イザヤ（を通じてヤハウエ）がヒフィル形ハシュケートを用いて、“出来るコンディションにないことは分かっているが、今だけシャーカトをしなさい”と勧めているのは的を得ている<sup>28</sup>。一方この7章の文脈はヤハウエへの信仰が主題となっている箇所であるから、再帰（アハズが自身をシャーカトさせる）と同時に使役（ヤハウエがアハズをシャーカトさせる）の射程をも含んでいる。“ヤハウエの導きによってシャーカトしなさい”“人間起源のシャーカトではなく、神のもたらす真のシャーカトに与りなさい”と読むことも可能と思われる。いずれにせよ、シリア・エフライム戦争前の緊迫時にアハズ王に向けられたハシュケートと同じ（または同形の）語が、アッシリアへの反抗を画策するヒゼキヤ王陣営に向けられている事は、同様の浮足立った状態に南王国があったことを想像させる。G・フォン・ラートは7章4節のハシュケートについて、自分の政治的、軍事的関与によって神の働く場を塞がないことに関係しているとし、また30章15節のハシュケートについては（ナハト「静かであること」と共に）、魂の内的状態を考えているだけでなく、全く特定の政治的行動においてとるべき態度であると語る<sup>29</sup>。

27 ヒフィル形ハシュケートは命令形男性単数と不定詞独立形が同形となるため、解釈が分かれる場合がある。イザヤ書7章4節「静かにしていなさい」のヒフィル形ハシュケートは *BDB*, p.1053 や *C. F. Keil and F. Delitzsch, Isaiah, Commentary on the Old Testament 7 (Grand Rapids: Eerdmans, 1980), p.209* では命令形男性単数であるが、*Cowley, Gesenius' Hebrew Grammar, § 133bb* では不定詞独立形とみなされている。

28 直後の「恐れることはない」もアル・ティーラー「あなたよ、さしあたって今のところだけは恐れるのをやめよ」という即時的禁止命令であり、ヒフィル形ハシュケートの再帰的用法とよく対応している。

29 G・フォン・ラート（荒井章三訳）『旧約聖書神学Ⅱ－イスラエルの預言者的伝承の神学－』（日本基督教団出版局, 1982）, 214頁参照。

## 6) ヒゼキヤと語根バータハの親近性

ハシュケートにおける7章と30章の関係は確認できたが、7章には語根バータハ関連語は登場しない。30章15節には女性名詞ビトハーがハシュケートと結びついている。聖書にはビトハーはここだけに登場する。それはヒゼキヤ時代の特殊性を浮き彫りにしているように思われる。語根バータハはヒゼキヤに関連して動詞カル形で16回、ヒフィル形で2回、女性名詞ビッターホーンで2回と計20回登場する。言わば語根バータハはヒゼキヤの敬虔さの象徴なのである<sup>30</sup>。少なくとも形式的にはヒゼキヤはヤハウエへの信頼を旨として歩む非の打ちどころない王であった。既存のバータハ、ポーテアハ、ベタハ、ビッターホーンを用いてヒゼキヤに“ヤハウエへの信頼”を説くことは釈迦に説法のような無理筋である。ヒゼキヤを批判するには、語根バータハをヒゼキヤ陣営の専売特許状態から引き剥がす必要があった。そこでイザヤは聖書宗教の手垢のついていない女性名詞ビトハーを創作したと言われる<sup>31</sup>。

## 7) イザヤによる女性名詞ビトハーの創出

### a 新語創出の背景

H・ヴィルトベルガーは「宗教の世界にはまさに、それ自身は全く適切である単語を、使い古されていたり、あるいは同意できない内容を背負わされているという理由で、もはや用いることができないという状況がある。にもかかわらず、一旦そのような言葉を用いると、その言葉を慣習的理解から鋭く区別することができなくなる」と語り、ビトハーを新造したイザヤの心境を「あたかもイザヤが、次のように言おうとしているように見える。そうで

---

30 序-(2)-2)で既述の通り詩編には動詞バータハがカル形で45回も登場し、ヤハウエに依り頼むことが強調されている。「王は主に依り頼む(ポーテアハ)。いと高き神の慈しみに支えられ/決して揺らぐことがない」(詩編21:8)等。

31 Cf. H. Wildberger, *Jesaja*, BKAT10/3 (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1982), p.1661. 同様に A・ヴァイザーも語根バータハの歴史的発展に対するイザヤ書30章15節の傑出した役割を認めている。Cf. Weiser, “The Stem בָּטַח,” p.192. 一方 Jepsen, “בָּטַח Bāṭach,” p.94 は知恵からイザヤへの影響を見る。

す、信頼することです。しかし、それはあなたがたが、通例 *bittāhôn* で理解しているのとは違います！」と代弁している<sup>32</sup>。

### b 女性名詞の持つ実践的具体的側面

では何故女性形が選ばれたのか。これについては30章15節の4つの単語（שובה, נחת, השקט, בטחה）をキアスムスと捉え、シューバーの女性形に揃えたとする説もある<sup>33</sup>。その場合も、何故女性形なのかの問いが残る。ヘブライ語において名詞に両性がある場合、しばしば男性形が原理、女性形が実践的側面を代表する<sup>34</sup>。真にヤハウエに信頼しているかどうかは、具体的に実践によって確認される。G・C・I・ウォン（Wong）は30章12節「お前たちは、この言葉を拒み／抑圧（עשק）と不正に頼り（בטח）、それを支えとしているゆえ」の「抑圧」に関して、「エジプトからの援助を懇請するための貢ぎ物を増やすために民から厳しく取り立てする強奪行為」という従来の解釈に加えて、「社会の無防備な者に対する抑圧と諸権利の否定」というより一般的の意味にとり、30章15節のビトハーの積義において「イザヤにとって“ヤハウエに信頼すること”は、倫理的な義と、社会における全ての者の諸権利に対する責任の要素を含んでいた」と主張している<sup>35</sup>。

## 8) ヒフィル形ハシュケートを使役と取る必要性

女性名詞ビトハーは語根バータハ「信頼」の自家ともいべきヒゼキヤ陣営に対して、真の信頼とは何かを指し示すための新造語であり、他者への具体的実践を要求するものであった。そしてまさにその新造語の本質を誤読させない目的でハシュケートが結合されているとするなら、ハシュケートのヒフィル形不定詞を、一足飛びに名詞相当と解釈するのではなく、自己完結し

32 H・ヴィルトベルガー（大島力・金井美彦訳）『神の王的支配－イザヤ書 1～39章－』（教文館、1998）、130頁。

33 Cf. Wong, “Faith and Works in Isaiah XXX 15,” pp.240-241.

34 例えば男性名詞ツェデク「義」（צדק）に対する女性名詞ツェダカー「恵みの業」（צדקה）等。

35 Cf. Wong, “Faith and Works in Isaiah XXX 15,” pp.244-245.

た再帰と採るのでもなく、使役形であることの意味を再評価すべきであろう。使役形本来の「他者にシャーカトさせること」「他者を抑圧から解放し、安堵させること」「他者から戦争の恐怖を取り除くこと」という読みを排除する特段の理由はないと考える。従来通り再帰と採るにしても、シャーカトできる筈のない自分にシャーカトせしめるハシュケートがヤハウエから来ている恵みであることに思い至るなら、それはやはり自己完結させてはいけない、他者への伝播、解放の連鎖を内包したものと読むべきではないだろうか<sup>36</sup>。

## (2) イザヤ書32章17節

正義が造り出すものは平和であり／正義が生み出すものは／とこしえに安らかな信頼である。

והיה מעשה הצדקה שלום ועבודת הצדקה השקט ובטח עד-עולם:

神の霊の降臨を描くイザヤ書32章15-20節は後代の付加であるが、第一イザヤの元来の終わりであったと言われる。最初の完結を期した断片にふさわしく、理想の王についての預言9章6節「ダビデの王座とその王国に権威は増し／平和(שלום)は絶えることがない。王国は正義(משפט)と恵みの業(צדקה)によって／今もそしてとこしえに(עד-עולם)、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」からミシュパート(30:16)、ツェダカー、アド-オーラームが受け継がれ、そして30章15節「お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに(השקט)信頼(בטחה)していることにこそ力がある」からは本論主題の語根シャーカトとバータハが

---

36 ヒフィル形不定詞独立形ハシュケートが自己完結した安らかさに留まっていない例としてはエゼキエル書16章49節「お前の妹ソドムの罪はこれである。彼女とその娘たちは高慢で、食物に飽き安閑と(השקט)暮らしていながら、貧しい者、乏しい者を助けようとしなかった。」が挙げられる。神から与えられた安らかさを自分の所で差し止め、貧しい者、乏しい者に伝播させなかったことが罪と呼ばれているとヒフィル形から解し得るのである。

受け継がれ、結び合わされている<sup>37</sup>。17節に登場する両語根の結合の仕方はハシュケート ヴァー・ベタハ「安らかな信頼」(השקט ובטח)である。ハシュケートは動詞シャーカトのヒフィル形不定詞独立形で真正預言イザヤ書30章15節と同じ(前置詞ベは除く)である。ベタハは士師記18章7節, エゼキエル書38章11節で既出の男性名詞であるが, それらの箇所では動詞ヤーシャブと前置詞レで結びついていたので, 語根シャーカトと接続詞ワウで結合されるのは初めてである。

### 1) ハシュケートと“ミシュパート&ツェダカー”

ハシュケートは30章15節では暗黙裡に社会的弱者の救済を射程に持つことが想定されていたが, この32章16-17節で“ミシュパート&ツェダカー”と一緒にすることで今やその「他者にシャーカトさせる」射程が明示的に確認されたと言えよう。“ミシュパート&ツェダカー”はヘンダイアデイス(二詞一意)として特別な意味を持ち, 特に王国期のそれは社会改革によって生み出された貧者・弱者に対する福祉の実行を指す術語だからである<sup>38</sup>。

### 2) ハシュケートとイザヤ書9章1-4節

またこの節が念頭に置いている8章23aβ-9章6節の理想の王の単元もハシュケートと反響していることを確認できる。

闇の中を歩む民は, 大いなる光を見/死の陰の地に住む者の上に, 光が輝いた。あなたは深い喜びと/大きな楽しみをお与えになり/人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように/戦利品を分け合って楽し

37 ヴィルトベルガーは16節のミシュパートとツェダカーの並行法が, 17節ではツェダカーとツェダカーの並行法になっているので, ドゥームに従いツェダカーを削除, ハシュケートをミシュパートに直し, ベタハの接続詞ワウを除去する。Cf. Wildberger, *Jesaja* BKAT10/3, p.1274. またかつてはBHKにおいても17節の'הצדקה ובטח והשקט'に脚注で「提案されてきたのは'המשפט בטח'」と記されていた。しかしBHSでは17節に脚注を付けず本文を尊重している。BHSの判断は妥当である。

38 Cf. M. Weinfeld, “Justice and Righteousness—צדקה ומשפט—The Expression and Its Meaning,” eds. H. G. Reventlow and Y. Hoffman, *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence* (Sheffield: JSOT Press, 1992), pp.228-246.

むように。彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を／あなたはミ  
ディアンの日のように／折ってくださった。地を踏み鳴らした兵士の  
靴／血にまみれた軍服はことごとく／火に投げ込まれ、焼き尽くされた。  
(イザヤ書9：1-4)

9章1-4節には戦争の恐怖と抑圧から解放された民の喜びと安堵が描かれて  
いる。語根シャーカトの単語こそ登場しないものの、この光景が他者を  
シャーカトさせるハシュケートの働きそのものであることが分かる。

### 3) 誤記か再解釈か

この32章15-20節の編集者はそれ故、イザヤの神学を实によく理解してい  
たと言い得るであろう。それ程の編集者が何故、16節の“ミシュバートと  
ツエダカー”というヘンダイアデイスを17節では、“ツエダカーとツエダ  
カー”という、まさに写字生の誤記としか後代の読者には映らないような奇  
妙な並行法に変え、“ハシュケートとビトハー”も“ハシュケートとバタハ”  
へと変えてしまったのであろうか。3つの可能性が考えられよう。

第一に現存する17節自体が写字生の誤記による偶然の産物である可能性で  
ある。この場合は研究者が本文をどのように復元するかによって編集者の像  
も規定されてしまうだろう。

第二に本文に誤りはなく、しかし、編集者は自身の時代の必要に迫られて  
語っただけであり、イザヤの使信の継承や再解釈などに関心を持ってはおら  
ず、真正預言のキーワードは彩りとしてランダムに寄せ集められたに過ぎな  
かった可能性である。

第三に本文に誤りがなく、編集者はイザヤの使信を正しく継承した上で、  
なおかつ再解釈を施し意図的に用語を変えて用いた可能性である。いずれも  
推論の域を出ないものである故、17節が今日現存するような本文となってい  
る故に開かれている間テクスト的読みの可能性を提示するに留めたい。



#### 4) ミシュパート喪失からベタハ採用まで 間テクスト的黙想

イザヤ書32章17節でミシュパートが消されたその違和感は士師記18章7節「シドン人のミシュパートに従って」との間テクスト的連想を引き起こす。ミシュパートの消失は愚かさの範例としての“ショーケート&ポータアハ”(שקט ובטה)の消失を意味する。

消えたミシュパートに代わって二つ目のツェダカーが現れ、その労作として“ハシュケート&ベタハ”(השקט ובטה)が生み出される。読者はそこにイザヤ書30章15節で預言者によって示され(南王国の論敵に拒絶され)た“ハシュケート&ビトハー”(השקט ובטחה)の完全な成就を予想する。

しかし案に相違して32章17節 bにある単語はビトハー(בטחה)ではなくベタハ(בטה)である。男性名詞ベタハは子音文字において動詞カル形能動分詞ポータアハと同じである。これにより読者は「静かで穏やかな民」に再び思いを至す。そして18節以降の神の王的支配を満喫する者と「静かで穏やかな民」が重なり合う効果をもたらすのである。

“ショーケート&ポータアハ”は愚かさの範例というネガティブなものではないため、廃棄され、イザヤの発明した新しい“ハシュケート&ビトハー”に取って代わられたわけではなかったことが明らかにされる。“ショーケート&ポータアハ”には真理契機があり、イザヤは否定的側面(軍事同盟への依存と慢心)を論敵に突きつけつつ、新語“ハシュケート&ビトハー”で肯定的側面(他者に安らぎを与え、戦いに頼らない平和)を保存し深化させた。廃棄・交代ではなく、復権・純化であることを明示するために、32章17節の編集者は“ハシュケート&ベタハ”を採用した。このように間テクスト的黙想を広げることも可能かも知れない。

#### 5) 永遠のハシュケート&ベタハ

32章17節の約束するハシュケート、それは士師記のショーケート&ポータアハのような孤立と思い込みの産物としての滅びの前の束の間の安らかな信頼ではない。終末的ヴィジョンの中で被造世界まで射程に収めた関係性の中で、他者を解放することの弛まぬ連鎖と伝播によって永遠まで至る安ら

かな信頼なのである。そしてこのヴィジョンは全ての「静かで穏やかな民」に然りを与えるものである。

本章の考察を通じてイザヤ書が両語根の結合に対して持つ画期的役割を確認できた。それはカル形のショーケート&ポーテアハが不可避免的に内包していたところの、戦争→シャーカト→バータハ→戦争という循環を、ヒフィル形のハシュケート&ビトハー／ベタハによって断ち切ったという点である。新たな戦争に対して無力であり、あるいは次なる戦争を招来するものでさえあった両語根の結合は、イザヤとその継承者によって、戦争を永遠に來らせない鍵語へと変わったのである。

### 結語

語根シャーカトとバータハの結合が常にシャーカト&バータハの語順である理由は、この結合が戦争と密接に結びついており、シャーカトが戦後の安堵、バータハが防衛への信頼を射程に持つことと関係していると思われる。

士師記18章7, 27節では“ショーケート&ポーテアハ”の形で現れ、不意の攻撃によって破滅させられる者がそれとは知らずに平和な時が続くと信じ込み、束の間の安寧を享受している様と関係している。それは弱肉強食の世界における不条理な虐殺に関係しているため、多様な解釈に道を開いている。「静かで穏やかな民」は戦争に加わらない平和的な生き方をしていた無辜の犠牲者の象徴とも、油断して滅びを招いた愚かさの範例とも評価を変える。歴史の教訓としても戦争を想定しない側の、現実を直視しない愚かさを暴露したものとも、真逆に、軍事同盟を過信する側の、これまた現実を直視しない愚かさを暴露したものとも様々に機能し得る。それは7節の難解な長文の描写の中に士師記著者が込めた錯綜する想いに起因するかも知れない。

エゼキエル書38章11節では“ハッ・ショーケティーム ヨーシェベラー・ベタハ”という同格表現がよるべなき帰還民イスラエルを指して用いられ、接続詞による連結とは異なる両術語の射程を確認できる。シャーカトは直近まで戦争とその抑圧に苦しめられた人々にようやく与えられた平和の

享受の中で得られる安らかさ、静穏と関係し、ベタハはヤハウエにのみ依り頼む他ない信頼と関係する。いわばここには「静かで穏やかな民」を見捨てない神への待望が語られている。

イザヤ書30章15節では“ハシュケート&ビトハー”という新しい結合がイザヤによって生み出された。滅びを免れようと軍事同盟による安全と安心に腐心する敬虔深い王に対して、その計画こそ“ショーケート&ボーテアハ”の愚かさに他ならないと突きつけ、現実の困難な政治的外交的緊張のただ中で、ヤハウエから来る静けさを選び取ることによって証しされる信頼に生きること、具体的には他者に戦争の恐怖や社会的抑圧から解放された安らぎを与えることが要求された。

イザヤ書32章17節では“ハシュケート&ベタハ”という形でイザヤの真正預言が正しく継承されている。天からの霊の注ぎを受けたツェダカーの労働は他者を神へと結び付け、人へと結び付け、被造世界へと結びつける。他者を恐怖や抑圧から解放する連鎖の中で永遠の安らかな信頼が実現するのである。

カル形のショーケート&ボーテアハは軍事同盟への信頼と自分自身の安らぎである故に、次なる戦争を招来するものである。しかしヒフィル形のハシュケート&ビトハー／ベタハはヤハウエへの信頼に根ざして他者を安らがせることである故に、永遠の平和に至るものである。過酷な弱肉強食の地政学的環境下で徹底した現実主義に貫徹した旧約の民が遺した語根シャカトとバータハの結合の歴史は、現代にも多くの示唆を提供しているのではないだろうか。

#### 参考文献

- Boling, R. G. *Judges*. The Anchor Bible. New York: Doubleday, 1975.
- Bons, E. “שָׁקֵט Šāqat.” Eds. G. J. Botterweck and H. Ringgren. Trans., J. T. Willis. *Theological Dictionary of the Old Testament* XV. Grand Rapids: Eerdmans, 2006, pp.452-457.
- Brown, Francis, S. R. Driver and C. A. Briggs. *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon: with an Appendix Containing the Biblical Aramaic*. Peabody, Massachusetts: Hendrickson Publishers, 1997.

- Butler, T. C. *Judges*. Word Biblical Commentary 8. Nashville: Thomas Nelson, 2009.
- Cathcart, Kevin J. “Isaiah 30:15 בְּשׁוֹבָה וְנַחַח and Akkadian Šubāt Nēḫti/Šubtu Nēḫtu, ‘Quiet Abode.’” Eds. I. Provan and M. J. Boda. *Let Us Go Up to Zion. Essays in Honour of H. G. M. Williamson on the Occasion of his Sixty-Fifth Birthday*. Leiden: Brill, 2012, pp.45-56.
- Clements, R. E. *Isaiah 1-39*. Grand Rapids: Eerdmans, 1980.
- Cowley, A. E. (ed.) *Gesenius’ Hebrew Grammar*. Oxford: Clarendon Press, 1910.
- Dahood, M. J. “Some Ambiguous Texts in Isaias.” *The Catholic Biblical Quarterly* 20 (1958), pp.41-49.
- Even-Shoshan, Abraham. (ed.) *A New Concordance of the Old Testament Using the Hebrew and Aramaic Text*. Jerusalem: “Kiryat Sefer” Publishing House LTD., 1993.
- H・W・ヘルツベルク (小友聡他訳) 『ヨシュア記・士師記・ルツ記—私訳と註解—ATD 旧約聖書註解5/2』 ATD・NTD 聖書註解刊行会, 2000.
- Jepsen, A. “בְּטָחַח Bāṭāch; בְּטַח Beṭāch; בְּטַחַח Bīṭchāh; בְּטַחֹחַ bīṭchāchōn; מִבְּטַחַח mibḥāch.” Eds. G. J. Botterweck and H. Ringgren. Trans., J. T. Willis. *Theological Dictionary of the Old Testament* II. Grand Rapids: Eerdmans, 1975, pp.88-94.
- Jong, M. J. de. *Isaiah among the Ancient Near Eastern Prophets: A Comparative Study of the Earliest Stages of the Isaiah Tradition and the Neo-Assyrian Prophecies*. Leiden: Brill, 2007.
- Keil, C. F. and F. Delitzsch. *Isaiah*. Commentary on the Old Testament 7. Grand Rapids: Eerdmans, 1980.
- . *Joshua, Judges, Ruth, I & II Samuel*. Commentary on the Old Testament 2. Grand Rapids: Eerdmans, 1980.
- Martin, J. D. *The Book of Judges*. Cambridge: Cambridge University Press, 1975.
- 鈴木佳秀訳 『旧約聖書Ⅳ ヨシュア記 士師記』 岩波書店, 1998.
- G・フォン・ラート (荒井章三訳) 『旧約聖書神学Ⅱ—イスラエルの預言者的伝承の神学—』 日本基督教団出版局, 1982.
- Weinfeld, M. “Justice and Righteousness—משפט וצדקה—The Expression and Its Meaning,” eds. H. G. Reventlow and Y. Hoffman, *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence* (Sheffield: JSOT Press, 1992), pp.228-246.
- Weiser, A. “The Stem בְּטַח.” Ed. G. Kittel. Trans., G. W. Bromiley. *Theological Dictionary of the New Testament* VI. Grand Rapids: Eerdmans, 1973, pp.191-193.
- Wevers, J. W. *Ezekiel*. New Century Bible Commentary. Grand Rapids: Eerdmans, 1982.
- H・ヴィルトベルガー (大島力・金井美彦訳) 『神の王的支配—イザヤ書1~39章—』 教文館, 1998.
- . *Jesaja*. BKAT10/3. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1982.
- Wong, G. G. I. “Faith and Works in Isaiah XXX 15.” *Vetus Testamentum* 47 (1997), pp.236-246.
- Zimmerli, W. Trans., J. D. Martin. *Ezekiel 2: A Commentary on the Book of the Prophet Ezekiel Chapters 25-48*. Philadelphia: Fortress Press, 1983.